

術情報システムにおける役割をも念頭において、図書館活動の活発化を促すことによって、本学の学術研究の進展に対して貢献しうることがを念願しております。さらに、図書館資料の著しい増加に伴って各部局の要望に応じて保存図書館としての役割を果たすことも、新図書館に期待されているのが現状であります。

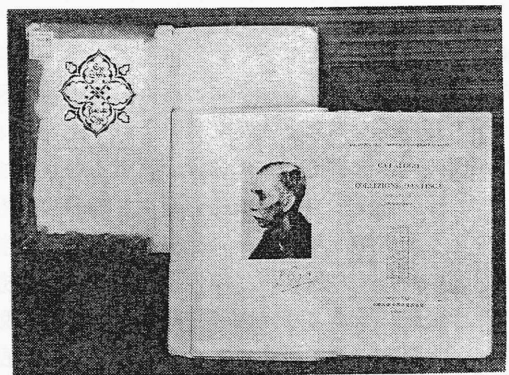
しかし、これらのことを具体的に、どのように実現していくか。道は決して容易なことではありません。

図書館システムの活動は、全学の教育・研究に深くかかわり合いをもち、各学問分野と相互に連繋し合うものでありますだけに、全学的な意志の反映のもとに、鮮明な図書館像の実現を目指して努力を重ねたいと思います。ここに重ねて図書館の整備充実、運営ならびに日常活動に対する各位の深いご理解とご協力、ご支援を心からお願いするものであります。

詩聖ダンテに魅せられた明治人の コレクション：旭江文庫

文学部図書室 村 橋 ル チ ア

イタリアの詩人 Dante Alighieri (1265-1321) の著作は各国語に翻訳されているが特に代表作“La Divina Commedia”(神曲)、“La Vita Nuova”(新生)などは古くから多くの人々に親しまれている。したがってその分野の研究者も数多くなっている。そして欧米には立派なダンテ・コレクションを所蔵している図書館があつて中でもコーネル大学のものは特に有名であるが、幸い京都大学にも戦前からすばらしいダンテ・コレクション：旭江文庫が備えられている。それは大賀寿吉氏(明治3年—昭和12年 1870—1937)がダンテ研究への絶大な情熱と努力をもって生涯を通して収集された愛蔵書である。大賀氏の号は出身地である岡山の旭川に因んだ「旭江」であつたため、このコレクションも「旭江文庫」と名付けられている。敬虔なクリスチャン(プロテスタント)で非常に英語の堪能な方だったと云われる大賀氏は、武田製薬株式会社(大阪)に勤務され、多忙な日常にもかかわらずダンテ研究へのたゆまぬ意欲を抱き続けてその当時の京大文学部教官(新村出、厨川白村、浜田青陵、黒田正利等)と親交を結び伊太利亜会(大正8年12月発会)その他で、「中世紀とダンテ」、「ダンテとシェークスピア」、「ダンテとシェークスピアの人生観に付て」など講演もされたようである。また京都文学会編「芸文」、京大英文学会編



大賀寿吉氏とそのエクス・リブリス

「ミューズ」その他の雑誌にも寄稿されている。ダンテ学者山川丙三郎氏(明治9年—昭和22年 1876—1947)とも親しく文通していられたがその手紙を編集した「大賀寿吉氏の書簡」(イタリア学会誌、3、7、8、11、15号)によって当時のダンテ文献収集と研究につくされたご苦労のほどがよく理解できる。今日のように敏速に海外の情報を得られなかった時代にもかかわらずイタリアをはじめ欧米の学界、図書館、出版界とたえず連繋をとってダンテ文献の情報を集め資料を厳選して蔵書構成の充実をはかられた。そしてただ自分自身の研究のためにだけでなく、日本の若きダンテ研究者の便宜を配慮して

おしみなく自費で資料を取揃えられたのである。また昭和4年には自ら“A Dante bibliography in Japan. 1929. 4, 49p.”を大阪で刊行、さらに同年ヨーロッパにゆかれフィレンツェの Olschki 社から“Bibliografia dantesca giapponese. 2.ed., riveduta e corretta. 1930. 59p.”も刊行された。こうして明治から昭和初期にかけてのダンテ研究者のひとりとして大いなる功績をのこして昭和12年他界された。その後故人の遺志にもとずいて蔵書の大部分が御遺族から本学に寄贈されることになった。京大附属図書館では、昭和15年本学文学部に開講したイタリア語学イタリア文学講座の黒田正利先生（明治29年—昭和48年
1890—1973）の御指導を得てこの文庫を整理して昭和16年には「旭江文庫目録」“Catalogo della collezione dantesca donata da Giukiei Oga. 1941. 312p.”を刊行している。間もなく起った戦争のためイタリア出版物の購入不可能な状態が終戦後も永くつづいたが、その間ダンテはもとよりイタリア文学研究者の大切な糧となっていたのがこの文庫で、現在に至るまで学内に限らず学外の研究者にも広く利用されている。そして今ではそのほとんどが貴重な稀覯本と云える。またこの文庫にふさわしい中世ヨーロッパ風の優雅なエクス・リブリスが添えられて大賀さんの風格がしのばれるような気がする。

旭江文庫（2671冊）の内容は16世紀から20世紀初期にかけて各国で出版されたダンテの作品（原典と翻訳）約 600点と、ダンテに関する研究書、参考図書、雑誌、及び逐次刊行物で特にダンテ永眠 600年記念に当る1921年（大正10年）の出版物は最も数多く集められている。主なものをえらぶと：

1. ダンテ全集では18世紀から20世紀初期の刊本で完全に揃っているのが原典13点で、その中にはダンテ全集を1冊にまとめ、単行本として刊行した最初のものである E. Moore 改訂の Oxford 版の初版（1894年）から第4版（1924年）まで揃っている。全集の翻訳は英、独、仏語と日本語訳で、いずれも20世紀初期の出版である。

2. “Divina Commedia”（神曲）については最も力をいれて収集され、原典だけでも約 200点

ある。古写本やインクナブラはないが Codice Landino（1336）、Codice Trivulziano（1337）、Codice Cassinese、Codice Caetani の複製版がある。また神曲の初期刊本である1472年のフォリーニョ版、エージ版、マントヴァ版と1474年のナポリ版の4点を比較対照出来るように組合せて編集した複製版：Le prime quattro edizioni della Divina Commedia [Foligno 1472, Jesi 1472, Mantua 1472, Napoli 1474] letteralmente ristampate per cura di G.G. Warren, Lord Vernon [ed. da A. Panizzi] Londra, T. e. G. Boone, 1858. xxvi, 478p. 5 facs. f° もある。16世紀刊本を少しとりあげると：

1502年ヴェネツィア刊：まだ La Divina Commedia（神曲）と云うタイトルは定着しておらず Le terze rime di Dante …（ダンテの三行詩）となっている。そしてこれは当時ヨーロッパの出版界に革新をもたらし非常に好評であった Aldo Manuzio（1450-1515）のいわゆる“aldine”（アルドゥス版）の一つで、イタリック体活字によるダンテ著作の最初の小型本である。

1512年ヴェネツィア刊：Opere del divino poeta Danthe con suoi comentii …（詩聖ダンテの著作及びその註釈）となっている。これはフィレンツェの人文主義者で15世紀における最も権威のある神曲註釈者であった Cristoforo Landino（1424-1498）の評註が付いて精巧な木版画が入っている。

1555年ヴェネツィア刊：はじめて La Divina Comedia（神曲）のタイトルで Gabriel Giolito が刊行している。書誌学的にも記念すべき版でジョリート版と呼ばれている。編纂者はヴェネツィアの文学者 Lodovico Dolee（1508-1568）である。

1568年ヴェネツィア刊：文学者 Bernardino Daniello（1500-1565）の死後3年たって彼の註解付の神曲が出版されたが文法的解説が丁寧になされている。

1595年フィレンツェ刊：“Accademia della Crusca”の人たちによる神曲の最初の版でこれは1502年のアルドゥス版をもとにして編纂したものである。

以上の外に「神曲」の16世紀刊本は6点あるが省略する。

17世紀刊本はヴェネツィア1629年刊が1点、18世紀刊本は Accademia della Crusca 改訂、1716年刊；1726—27年刊；1751年刊；1752年刊；原典に17世紀ジェスイット派詩人 Carlo d'Aquino のラテン語訳と簡単な註のあるナポリ1728年刊（全3巻）の5点である。

19世紀、20世紀にかけて出版された神曲は数多く集められている。

ボッカチオの手によると云われた写本をもとにした Fanton 編の1820年版、Lombardi の註釈で非常に良心的であると評価された1820—22年版、19世紀ドイツのダンテ学者 Karl Witte 校訂の1862年版、初期ダンテ註釈者 Jacopo della Lana (1290? -1365) のイタリア語註解版を L.Scarsabelli が改訂して1866年に刊行したもの、スイスのダンテ学者 Giovanni Andrea Scartazzini(1837-1901) の註解のある1875—1900年版、ボッティチェリの図版の入った Nonesuch Press の1928年版など、当時の権威あるダンテ学者の註のある大切な版は一通り集められている。豆本も数点入っている。

神曲の翻訳は22の言語の訳が集められて、その中にはアラビア語、クロアチア語、ウェールズ語、ロシア語訳も含まれている。

3. “Vita nuova”（新生）については初版本（1576年刊）で最初のダンテ伝の作者であった Giovanni Boccaccio (1313-1375) の「ダンテの生涯」を合冊して、フィレンツェの Bartolomeo Sermartelli が刊行したものがある。その他19世紀、20世紀初期の出版で A.D'Ancona 註解の1884年版をはじめ、M. Barbi, G. L. Passerini, N. Scherillo G. A. Cesareo, N. Sapegno 等の校訂版がある。

翻訳には日本語をはじめ英、独、仏、デンマーク、スペイン、スウェーデン、ハンガリー語訳がある。

4. “Convivio”（饗宴）は16世紀刊本：ヴェネツィア1529年刊；1531年刊がある。そして19、20世紀初期の刊本と翻訳（日本、英、独、仏語）が

ある。

5. その他のダンテ著作：Rime（詩集）、De vulgari eloquentia（俗語論）、Monarchia（帝政論）、Epistolae（書簡集）、Eclogae（牧歌）、Quaestio de aqua et terra（水陸論）の原典と翻訳、そして Sette salmi penitenziali（痛悔七詩篇）のボローニア1753年刊がある。

6. 参考文献に関しては約1300点ある。とりわけ M. Barbi, T. Cassini, Isidoro del Lungo, G. L. Passerini, G. A. Scartazzini, M. Scherillo, K. Witte 等、戦前活躍していたダンテ学者の著書はほとんど網羅されている。その他ダンテの息子 Jacopo Alighieri, Pietro Alighieri らの「神曲の解説」、G. Boccaccio の「神曲」の註解と「ダンテの生涯」、Sandro Botticelli (1444-1510) の「神曲画集」、アリストテレス的詩論学者の立場から「神曲」を非難したシエナの B. Bulgarini (1535-1621) の著作(1583年から1602年までの刊本)が5点ある。

7. 最後に雑誌、逐次刊行物には Collezione di opuscoli danteschi inediti o rari. Il Giornale dantesco. Lectura Dantis. Studi danteschi. 等その他ダンテ研究だけでなくイタリア文学史、中世史関係の資料が約30種ある。

旭江文庫は1936年迄の出版物で終止している。先日来学したボストン大学ダンテ学会長 Cioffari 氏も、この文庫は米国においても第三位を下らないほど立派なものだが、収集が中断していることは非常に残念である、と述べていたと云うことである。戦後の新しいダンテ文献収集については文学部を中心に努力しているが未だ充分なものとはいえない。旭江文庫という優秀なダンテ・コレクションの基盤を備えている本学において日本のダンテ学研究の進展のためにも、大賀氏の偉業を継承し、その後のダンテ文献を補充することによって旭江文庫をより大きく成長させるとともに、その利用価値をさらに高めることを期待したい。

なお旭江文庫目録編集に関与した人々のうち、今も御健在の先輩・木寺清一、城戸善一、佐々木乾三、新村猛、谷口寛一郎の諸氏と筆者は、お互によりき経験を得たことをよろこびあっている。

（1982年3月）